明日の淡海

Vol.14
2006.3.31発行

自然と人との共生をめざして

Contents

- 巻頭言　**里山とつきあう** …… 2
  写真家　今森　光彦
- 巻頭特集　**明日の滋賀県の市民運動を考える座談会** …… 3
  ーせっけん運動を顧みてー
- 県外環境取り組み事例　**茅葺きスローフードレストラン「茅乃舎」** …… 10
  株式会社久原本家　代表取締役社長　河邉哲司 インタビュー
- 環境トピックス　**新エネルギーを考える** …… 14
- 財団活動紹介　環境情報発信事業等 …… 16
- 滋賀県地球温暖化防止活動推進センターだより　推進員奮闘記 …… 18

巻頭言
Kan・Tou・Gen

里山とつきあう

写真家 今森 光彦

今から30年ほど前の話しだが、古都、大津の町なかにある三井寺から坂本へつづく山づたいの道を車で走り、そのまま、琵琶湖岸をとおらずに漁師の町、堅田にでようとした。そのとき、集落の網の目のようにつながるややこしい農道に入ってしまった。これが、私と棚田との出会いである。

迷った農道をそのまますすむと急にのぼりになり、墓地が見えた。墓地は、こぶのような丘にあり、私は車をそのわきにとめて、墓地のいちばん頂上へかけのぼった。墓地のてっぺんから見下ろす風景をみて私はほんとうに驚いた。山のすその谷に段々状の田んぼが重なり合っていたからだ。9月の稲刈りシーズンともあって、黄金色の海原に、人がぽつりぽつりと仕事をしていた。谷を仕切る尾根の向こうには、雄々とした比良山が遠くにかすんでいる。視線を山の反対側に向けると真っ青な琵琶湖が顔をのぞかせていた。里、山、湖という里山の三要素とでもいうべき光景が同時に視覚に飛び込んできた。そのとき、自分の生まれ故郷がこれほどまでに美しかったのかと感動したものだ。

こんな鮮烈な出会いがあって、とうとう棚田のはずれにアトリエを構えることになってしまった。田園に長く住みつくと、田んぼや琵琶湖のヨシ原までが、今までとはちがってみえてくる。最近は、一昔まえにはあたりまえだった質素な暮らしが見直され、シンプルな生き方を目指す人が多くなった。人と自然の共存というキーワードは、ますますひろがってゆくのだろう。里山とのつき合いは、まだまだつづきそうである。

明日の滋賀県の市民運動を考える座談会
―せっけん運動を顧みて―

びわ湖大津館（旧琵琶湖ホテル）にて

先号のせっけん運動の特集に引き続き、今号もせっけん運動を特集します。先号では日本石鹸洗剤工業会に取材し、その当時のメーカー側の考え方、その後の商品開発などを聞きました。今号では、この特集を稔りあるものとし、将来の滋賀県の環境運動について考えるために、せっけん運動に携わられた世代の次世代の方々を中心にせっけん運動に対する意見や未来への展開等を座談会で伺いました。なおコーディネーターについては、ジャーナリストの大谷昭宏氏にお願いしました。

内なるせっけん運動

大谷　ご自分自身でせっけん運動に関わった方はいらっしゃいませんでしょうか。だいたい１９７０年代ですよね。奥田さんは70年代生まれですか。

奥田　私は１９７２年生まれです。もともと出身は大阪ですけれども、田舎のほうが滋賀県の愛東町というところだったのです。その行き帰りの道中のバスで、せっけん使用について、放送が流れていたことをかすかに覚えているというのがあります。そういう記憶が、どこで仕事をしようかと選ぶ時に、影響が出たのかなというふうに自分で思っています。

大谷　なるほど。黒田さんはどうなんですか。

黒田　私は、言ったら年がばれますが、その頃10歳だったのです。私も田舎が近江八幡のほうで、両親に連れられて琵琶湖に泳ぎに来ていたのですが、汚いからということでやめてしまったのが、すごく残念だったのです。そこから、琵琶湖はなぜ汚いのだろうという思いがありました。ちょうど母親が生協活動をしていましたので、その影響で「合成せっけんを使うのをやめましょう」みたいな運動が大阪のほうにも波及しまして。

大谷　言うなれば、その環境運動というのは琵琶湖と一緒で、大阪のほうまで流れて来たと。伊藤さんは学生ですね。生まれているどころか、形にもなってない頃ですね。

伊藤　１９８３年生まれです。いま大学で環境科学をやっていて、せっけん運動のことというのは、「県の条例を動かした運動」みたいなかたちで教わります。でも、やはり同じ学年の子でもせっけん運動を知らない子はたくさんいました。同じ環境科学部でも。

大谷　「滋賀県立大学生なんだろう」と言ってやればよかったのに。（笑）「そして、この県にはこんな運動があったんだ」と。伊藤さんはもともと滋賀県のお生まれですか。

伊藤　いや、神奈川県です。

大谷　もともと環境問題に関心があったから滋賀

に来たわけですか。

伊藤　たぶん、母が生協運動やっているとか。やはり今から思えば、滋賀県のせっけん運動から全国に広がることになりますよね。東京のほうにも来て、母親もそういうふうにして、私も小さい頃から、まったく合成洗剤を使うことなく来ています。だから、ある意味そういう環境の世代の、また違った世代なのかなと私は思っています。

大谷　環境問題が第2世代に入っているというというのはおもしろいですね。

畑　僕はたぶんこの頃小学生ですね。

中村　私は京都出身で、琵琶湖の水を飲んでいる立場です。就職して初めて滋賀県とご縁があって、こちらに来たのです。琵琶湖の恩恵を受けている立場だったのですけれども、自分自身はそのせっけん運動、私は1980年生まれなのですけれども、滋賀県在住の同級生たちが粉せっけんを使っていたという話を聞いて驚いておりまして、どちらかというと他人事のようなことだったのです。

大谷　ということは、むしろ、直接あの時代、あの運動にかかわってきた方というのは、この中にいらっしゃらないのですね。私も、もともと東京のほうで生まれたものですから、もうこの時代はもう新聞記者になっていたのですけれども、あまり社会部の記者と環境というのは関係なかった。ただ、武村さんが知事として非常に頑張っておられたというのは新聞記者として知っていましたけれども、直接関わっていなかった。

　ただ、すごいなと思うのは、普通、運動というのは3年も経ったら、かすかに知っている人はいるかもしれないけれども、今こうやって運動の時には生まれていないかせいぜい小学生ぐらい。そんな人たちがみんな、「あの運動」はとして残っているというのは、やはりすごいと思うのです。あまりこういう環境運動はないのではないでしょうか。

奥田　そうですね。かなり小さなエリア、一つの身近な河川、水路に近い河川も、ご近所さんでの活動というような話はいろいろと聞くのですけれども、これだけ時間的にもエリア的にも大きな足跡を残して、なおかつ語り継がれているというのは、あまり僕は聞いたことがないですね。

大谷　そうですね。伊藤さんから見ても、市民運動というと、まさに市民であって肩書きがあるわけではない。社会的にそう活動が広いわけでもない。それはやはり当時のせっけん工業会というものを相手に、最後は条例までできるようになった。今の世代から見たら相当「すごいな、この運動は」という感じがしません？

伊藤　別にこのせっけん運動に限らず、学生運動とか、平和運動とか、そういう関連のその時代、1960年代、1970年代は、その行動力は何なのだろうかと思います。

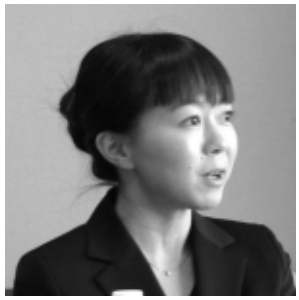
大谷　そうだよね。それはおじさんたちの時代だから。（笑）学生運動なんか……。

伊藤　それは、ある意味幸せです。

大谷　それをしゃべり出したら止まらないよ。（笑）

大谷　昭宏
東京生まれ。読売新聞社で記者として活動したのち、大阪に事務所を設立。テレビ、新聞などで活躍中のジャーナリスト。

奥田　一臣
大阪生まれ。環境保全に関わる仕事を求めて、滋賀県職員となる。現在、琵琶湖の向こう側に持続可能な社会を見つけようと、調査研究に励んでいる。



中村　知代
金融機関勤務。支店での窓口係の経験を経て、現在は環境を中心としたCSRを推進するセクションに所属し、金融機関の役割の中に、持続可能な社会の構築を見いだし、広い視野で日々勉強に励む。

伊藤　真紀
横浜生まれ。滋賀県立大学環境社会計画専攻。滋賀県のせっけん運動をはじめ環境保全に携わる個人のライフスタイルに関心を持つ。

畑　源
草津市生まれ。船大工を業とするかたわら、琵琶湖の環境学習・イベント等を主催し、地元の若手リーダーとして活躍中。

黒田　由美子
大阪生まれ。母親が生協活動をしていたため、自然に環境問題にふれるようになり、当時のせっけん運動も記憶している。その影響で、現在もなるべく環境にやさしい生活を心がける。仕事を持ちながら、子育て・主婦業に奮闘中。

やはり、黒田さんね、そういうパワーというのか、どういう運動も非常に純粋だった。ただ、「せっけん」というところに私は非常に意味があったと思うのです。

黒田 そうですね。絶対どの家庭でも使う物ですし、それに気をつけるかどうかというだけで運動になってきてしまっているところもあると思うのです。うちの母は、なぜ今でもせっけんを使っているかというと、合成洗剤を使っているものすごく手荒れをしていたのに、せっけんを使ってから手が荒れなくなった。彼女自身の体質だけの問題かもしれないのですけれども、結果的にそういうことがあって、いまだに合成洗剤を使わない。

大谷 せっけんというのは、ひとりも残らず全部が使う。私たちは、琵琶湖を汚されて、琵琶湖の水が汚くなって、それでも飲まなければいけない。自分の住んでいる琵琶湖はきれいではない。だから自分たちは被害を受けているのだと思ったら、どっこい、そうではない。「あんたたちのせっけんだよ」と。「ええっ?」と。私たちが加害者だったと。つまり、何が言いたいかというと、伊藤さんの勉強ではないですけれども、環境問題というのは、実は被害者である人たちが加害者になっているのです。

さらに面白いのは、たいがいの市民運動というのは、企業に対しては「止めろ」なのです。原発を含めて。これとせっけん運動が一番違うところは、「止めろ」ではない、「私たちは使わない」ということです。これはすごく環境運動のはしりとしては、おもしろいです。

中村 そうですね。消費者の力は本当に大きいと思います。やはり最近の企業不祥事を見ていても、消費者が企業の商品を、ネグレクト（無視）してしまえば、業界からは商品は消え去ってしまいます。消費者の力はすごいなと思います。

大谷 だから僕はね、せっけん工業会は慌てたと思う。「こんな物作るな」というのだったら、こちら側も言い分がありますよ。こちら側はこういう対応をしますよと。ところが、使わないと条例で決められてしまうと、なかなか「使え」とは言えないわけです。買っていただくわけだから。それが最大の慌てた理由ではないかと思うのです。

原発を止めろとかいう運動と違って、説明して立地条件を出して、補償をして、納得してもらって、それで建てる。ところが「買わない」という人たちに対しては、なす術がないはずなのです。そういう意味で同じ環境運動だとか市民運動だとか言っていても、これは何かをしないという運動の強さだと思うのです。

つまり、環境に一番敏感な人たちが動き出した。赤ちゃんを持っている家庭はこれから子育てをしなくてはいけない。その人たちが運動の中核になる。

せっけん運動がもたらしたもの 世代を越える土壌

大谷 あの時せっけん工業会が言ったように、リンの濃度というのは、そんなめちゃくちゃなものではなく、琵琶湖のリン汚染の1割ぐらいしか合成洗剤が影響していないはずだと。それから、ある意味でえん罪ではないかと、標的にされたと。それに対して、まともにぶつかってしまい、逆に環境運動、水質問題を燃え上がらせる元になってしまった。

奥田 そうですね、今の私みたいに科学的に何かを調べていく立場から言うと、当時の比率的なものがいろいろな、試算の仕方自体にも多少の誤差を伴いますので、言い分はそれぞれ出てくる部分があります。

大谷 結局、せっけん業界なんかは、どんどん品質改善していくわけです。リンの少ない合成洗剤を作っていく、「ほれ見たことか」と。1980年代になって、なるほど、滋賀県の合成洗剤の使用量は大幅に減るのです。同時に合成洗剤といえども、リンの含有率を大幅に減らしていくわけです。

ところが工業会に言わせれば、「そのことで琵琶湖の水質がよくなったか」。1980年代になって悪くなっているではないか。決して水質全体がよくなっていない。リンは減った。そのあと、いわゆる環境を研究している側からいうと、その運動の評価というのはどうなのでしょうか。

伊藤 社会科学的なのは、今やっているところなので何とも、まだ評価という段階まで、そこまでちゃんと調べていないのですけれども、運動を支えた人々は多くは女性だった、そういう人たちの何かできるというか、とにかく何をしていいかわからない状態で、その「せっけん」という一つの運動ができたということで、いま現在この滋賀県でいろいろと行われている環境への取り組みの、大変意味のある環境運動の土壌ができた。

大谷 うん。それは例えば黒田さんところは、今でもお母さんが合成洗剤ではない、それから、あなたが自身がもっと優しい洗剤、せっけんではないにしても、いわゆる合成洗剤の中でも非常に環境にいい物を使いたいと思っている。それは、あの運動がやはり根っこにあって、その成果というのは必ずしもあの運動が百パーセント正しいとか正しくないとかは別個にして、残したものというのはあると思うのです。

黒田 はい。それは大きいと思います。やはり、私も子どもを生んで、洗濯をする時に考えます。なぜそういうことを考えるかというと、やはり母がそういうことをしていたからで、それを受け継いできているというのは、私が今やっている環境に悪そうなものはなるべく使わないとか、そういうことに関してはその影響というのは大きいと思います。

畑 先ほどの、僕の住んでいる草津市は、もう早い段階から分別ゴミ収集もしていまして、それを市民がすべてオーケーをしている。この週末に「こども環境会議」が草津市であるのです。そこに出ている子どもたちに「家で分別している人」と言ったら、全員手を挙げるのです。小学校自体でも取り組みとしてすべてやっています。そういうのは黒田さんが言った自分の親がやっていることで、

すごく入り込みやすいと思うので、30年前に起こった、その時に活動した人たちがもう今おばあちゃんになっていると思うのですけれども、その孫たちが「おばあちゃんがやっているから」「おばあちゃんとお母さんがやっているから」というので、これは続いているのだなと。

大谷　それと、合成洗剤がたしかにターゲットにされた。そのうち、その工業会がリンの含有量を減らした。それから、琵琶湖の水質はよくなっていないではないかというと、何かこちらはいちゃもんつけられたみただけれども、そうではないと思うのです。

　そう言われれば、あの運動をした人たちは、ほかでもっと悪いものがあるのではないかと、一生懸命探し出すと思うのです。「そうか、それで終わりだ」というのではなくて、「待ってくれ」と。「それを減らしても水質がよくならないから、今度は何をしよう」と。「ほかにも犯人がいるかもしれない」と。

　「勝手にそんなこと言うけどね、実はあんたたちが垂れ流しているビールだとか牛乳だとか、そういうのがこんなのはせっけんより恐いんだよ。あっちのほうがよほど富栄養化につながっているんだよ」と、当然反論して出てきます。「おお、そうか」となるでしょう。何もなかったら、自分たちが垂れ流しているビールだとか米のとぎ汁だとか牛乳だとかが、実は合成洗剤どころか、それ以上に汚している。そういう企業と市民の緊張関係というのは、私はこの場合非常によかったのではないかと思う。

中村　一方的に、企業にだけではなくて、消費者自身も何か悪いところは直していくという運動は、なかなか、過去の運動でもないと思います。どちらかと言えば、だいたい企業が攻撃されるだけで、それで結果的に企業も改善策を何らか取っていると思うのですけれども、消費者としては自分たちは被害者だという意識だけで、悪く言えばけしかけているような運動もあると思います。そういう意味では本当にお互いにとって良い結果になったのではないかと思います。

大谷　そうですね。となれば、向こうが作戦を間違えた。工業会が乗っかってしまったから、今ごろになって四つに組みすぎたかなとか。特に言い合いになれば、お互いに欠点というのは出てくるではないですか。片一方が「ごめんなさい」というのでは、お互いに欠点は出てこない。

せっけん運動の評価　琵琶湖あるがゆえ

大谷　私の関わり合った中で、滋賀県というのはやはり環境問題に関しては、日本で有数の先進県だと思うのです。これはせっけん運動が根っこにあるでしょうし、もっと言えばやはり大きなここ琵琶湖というものがある。「抱きしめてＢＩＷＡＫＯ」なんてのもある。あれは皆さんは行ったのかな。

黒田　私は行っていないです。

畑　行きました。親と手をつないだみたいな気がします。

大谷　まあ、ばかでかいことを考えたもので。グルッとあれしたら二百何十キロあるのでしょ。

畑　はい２３０キロぐらいあります。

大谷　あの運動そのものが、せっけん運動と一緒で後々いろいろと評価が変わってくるわけですけれども、少なくともそういう何か、滋賀県にはそういう、三段話ではないけれども、琵琶湖があります、環境があります。琵琶湖ももう少し自然に対しても優しくなりましょう。もう一つ進んで人に対しても優しくなりましょう。では障害者のためにも……。

奥田　この頃思うのが科学的ではないことをよく思うのです。というのが、環境というのは本当に漠然としたものでわかりにくいものなのですけれども、この滋賀県の人に話をすると、琵琶湖というもので明確に意識ができている。意識できているということが、つまり一番よく見ているのかなと。

　私たちは、琵琶湖の水質の調査とかやって、科学的な分析は細かいことやっていますけれども、皆さんは感覚的なもの、何かちょっと違うとか、何かよくないのではないかというような感覚的なところから見ている。そういうことはもう滋賀県の特徴ではないかなと思います。

大谷　やはり、琵琶湖をどうしようかという話になってくると、やはり善きにつけ悪しきにつけ、琵琶湖という部分が突き動かしている。せっけん運動だって、琵琶湖というものがなければ生誕してこなかったのです。琵琶湖が突き動かして、先ほどの「抱きしめてＢＩＷＡＫＯ」ではないけれども、「何で人の命、障害者までいくんだよ」みたいな、そこが私はマザーレイクの語源だと思うのです。いろいろなものを生み出すからこそ、そういうことでしょう。畑さんそう考えない？

畑　わたしは常に水辺で住んでいるのです。最初

の話に戻ってしまいますけれども、小学生の頃泳いでいました。たぶんその運動が始まった時、一番汚かったのです、この南湖。それでしばらく泳がなくなって。ところがここ最近はもうデータでも出ていると思うのですけれども、南湖はきれいになっていますよ。

奥田 だいぶ改善されています。

大谷 透明度が上がっていますね。

畑 これは実際、子どもらを乗せて透明度の検査しているので、びっくりするぐらい。前に大発生している藻もきれいに見えます。その水辺で直接している人のほうが、案外そう「きれいになったからもういいん違う」みたいな。こわいですね。

大谷 中村さんの銀行といったら、金融機関と環境とは縁がなさそうですけど。

中村 金融機関というのは、ある意味、市民団体と同じぐらい社会を変える力があるというふうに、私は常々思っているのです。

核開発をするような機械を作っているところにはお金を貸しませんよと、そのぐらいの牽制力というのが金融機関にはあると思うのです。

大谷 それは、人間は金貸さないと言われたら……。(笑) 一番こたえる。銀行は「もう金預けない」と言われるのが一番困るしね。

中村 そうですね。私たちに預けていただいたお金がどういうところに使われているかということを、きちんとクリアにしていくのも、コーポレート・ソーシャル・レスポンシビリティCSR(Corporate Social Responsibility)――企業の社会的責任ではないかというふうに思います。

大谷 黒田さんは1970年代に琵琶湖に来られて、さっき畑さんがもう琵琶湖の南湖に入ったら汚かった。そこまで汚れた時期があったと。そこがその時期だったと思うのだけれども、そこからだんだん琵琶湖がきれいになってくる。

一番大事なことはやはり、大阪も含めてそうなのですけれども、「きれいになったからいいじゃん」「もう琵琶湖の水飲めるんだ」と、「改善されたんだ」と。それは逆に、案外水辺に住んでいる人たちが無感覚というか、「もういいよ」みたいな。そこはやはりこの運動の将来の展望があるとすれば、例えば今その合成洗剤、「やはり私は使わない」「少なくとも使うにしても、環境に優しい物を使いたい」。まさに琵琶湖を本流にして、それが全国に伝わっていかないと、運動というのは展望につながってこないと思うのですね。

黒田 なので、そういうふうに世代にちゃんと意識を植え付けていかないといけないというか、植え付けていける結果を出せたというところはよかったと思います。やはり、環境問題に関しては特にですけれども、問題がひどくならないうちに何とかしなくてはと考える人間がそれによってできてくるのではないかなというのもありますので、ちょっと琵琶湖から離れた大阪ですけれども、そういう飲み水がきれいになってよかったというのと同時に、やはりそれは私たちができることで守っていって、間接的ではありますけれども、そういう意識は持っていきたいと思います。

外(未来)に向かって

大谷 それでは、最後のテーマになろうかと思いますが、いま皆さん、それぞれがどう認知していたのか、それから、どう評価するのか。それからこの運動は今ではどういう展望があるのかということでお話しいただきたいと思います。

いみじくもいま黒田さんのほうから手前で止めようという話がありました。このせっけん運動の残した一つの教訓というのは、私はある意味では、手前で止めた部分と手前で止まらなかった部分、つまり1970年代にあそこまで汚してしまった。

でもその一方で、合成洗剤が汚染の主役になる前に、いち早く止めにかかった。しかもそれは、出荷している側が「これは大変なことになる」という、いわゆる欠陥商品だとか、あるいは食品のBSEの問題だとかというのではなくて、受ける側が大変だとということで受け止めた。これはすごく意味があったと思う。

いろいろ説があるのですけれども、世界で有数の古代湖である琵琶湖は、おそらく400～500万年前にできている。しかし琵琶湖が本当にひどくなったというのはこの50年なのです。高度成長に入る昭和30年代。500万年からすると50年というのは10万分の1なのです、琵琶湖の長い人生で考えると。10万分の1で壊滅的打撃を受けたわけです。

いちばん大事なことは、その壊滅的打撃を与えた時期に我々はいたわけです。その10万分の1の憎たらしいやつなのです。恨み骨髄なのです。せっけん運動というのは、やはりある意味では10万分の1の憎たらしいやつが、少しばかり、ほんの少しばかり贖罪をしたというに過ぎなかったような気がするわけです。

最初に、「我が内なる琵琶湖」を伺った。では、これから自分たちは、琵琶湖と共に生きた世代として、我が外なる琵琶湖、外に向けて何ができるのかというのを締めくくりにお一方ずつお伺いして締めくくります。

奥田 はい。せっけん運動というテーマで話を始めているわけなのですけれども、実はその当時と今とで、琵琶湖と我々の生活の関わりの関係というか、それはさほど大きくは変わっていないのです。我々が使ったものが外に流れて、それが滋賀県の場合は琵琶湖に流れ込むという、同じスタイルが続いています。

あの当時、せっけん運動の一つ大きな運動にエネルギーを与えたことに、淡水赤潮という琵琶湖で発生した非常に衝撃的な事実があります。いま、赤潮はまだ依然として発生は続いておりますけれども、現在、我々が生活の中から環境に関わりのある化学物質といったものは、そのほかにたくさんあります。

それを、今の私の立場でいきますと、赤潮というような事実ではなくて、その手前の段階で今どういう状態にあるかということを我々自身が感じて、見て、知って、そして自分たちの生活をまた

振り返る、こういったところに今、私の立場であれば調査研究という中で一つ皆さんに考えてもらえる、そういうような情報を見つけていきたいなというふうに思っています。

畑　取り組むかたちとしては違うのですけれども、琵琶湖をもっときれいにして、環境をよくしたいと思って活動しているので、今やっている活動は自分たちが思いつくことをまず始めているので、子どもたちと一緒にやっています。

そこに協力してもらえるところ、まず行政、次が学校現場。これがみんな独立していろいろと個々には頑張っておられるのですけれども、連携してできていないところが多いのです。そこを、うちみたいな民間というか、ＮＰＯ的な団体がつなぐと。あともう一つ来て欲しいのが企業さんです。

大谷　そうですね。協力してくれないところには、お金を貸さないというわけにもいかないし。（笑）

畑　いま企業さんが参加しないところで、農業体験というのがいま市役所の協力も得て、学校と一緒に地元のおじさんたちに来てもらって、リンの問題で言うと、現在の琵琶湖に流入しているリンの原因が一番大きいのは田んぼではないだろうかと。

大谷　そうですね。リンの場合は、かなり農業用水の可能性が高いのです。

（注）「滋賀の環境２００５」によるとりんの汚濁負荷量の割合は、家庭系38・６％、工業系22・１％、農業系14・７％

黒田　子どもたちに「この水は琵琶湖から来ているんだよ」ということも教えて、こういう活動が琵琶湖でなされているのだということも伝えたら、やはりそうしたら今度、子どもたちも自分の直接の環境をどう守るかというところまで考えられるのではないかと思いますので、そういった意味でも次世代につなげていくということが大事なことだと思います。

中村　もっと、金融機関として環境問題を変えていくために何ができるのか、環境を良くするようなお金の使い方というのを、子どもたちに教えていきたいです。お客様にも環境に取り組む銀行を応援して欲しいと呼びかけていきたいと思います。逆に私たちも環境に取り組むお客様を応援していきます。

またもっと滋賀県が先進県となって、こういう運動を全国にもっと広げていけばよいと思います。さもなくば地球の未来はない。また逆に、今ならはじめれば間に合うというふうに思っております。まず、身近なところで、出来ることを一生懸命に取り組みます。

大谷　さて、将来若い世代として環境に関わっていく。でも、30年前には、実はお母さんたちの世代にこういう運動があった。この頃にまさに画期的なことだっただろうし、小さな市民から始まったのに、県条例まで作り出す。その県条例に実は日本の財界というか産業界というか、工業界というか、まともにぶつからなければいけないような運動だった。

その間にどれだけ環境問題が進んだのだろうかは別にして、では、これからどういうことを、つまり畑さんがおっしゃった次の世代にやることがもういっぱいできているのではないか。

伊藤　ちょっと趣旨から結構離れると思うのですけれども、どんなに私が環境に対して配慮してやったとしても、もう50年60年ぐらい前に滋賀県で味わえた自然からの恩恵は、決して私の世代では返ってこない。行動をしたとしても、何もできない、何も変わらないのではないかというのが、今の世代の何となく共通認識なのではないかと思うところがあるのです。

こんなに頑張って、例えば車に乗らない生活をしたとしても、それは自分の利便性が排除されるだけであって、自分たちがいい環境を自分たちの世代で得られるという確信はまったくない。でも、先ほど中村さんがおっしゃったように、今ならまだ間に合う。私が生きている間には味わえないとしても、後の後の後の世代にとってみれば「やはりあそこで何かしていなかったら、私たちは得られなかっただろうね」という環境が得られる世代

特別寄稿

石けん運動を振り返る

林　美津子

今でこそ、多くのＮＰＯが色々な分野で活動しておられますが、かつて住民運動不毛の地とまで云われていた滋賀県で、主として女性達によって後々まで残る大きな成果を挙げた石けん運動こそ、滋賀県における初めての住民運動といってもよいのではないでしょうか。

昭和40年代の後半頃から、東京の多摩川で川面から合洗（合成洗剤）の泡が風に舞う映像がテレビに映され、滋賀県でも瀬田川などで同様の光景が見られるようになりました。当時主婦湿疹やおむつかぶれ等の皮膚障害も多発し、環境面、健康面の両方から合洗の問題がやかましく取り上げられるようになりました。

時折、紙面でその２文字を見ても、それは瀬戸内海のこと…と、全く意にとめなかった“赤潮”。それが思いもよらずびわ湖に発生したのです。それを契機にびわ湖の水質の問題として、石けん運動が一気に盛り上がりました。

合洗を追放するためには何とかして行政の力で条例を…という県民の強い声に押されて遂に行政も動きました。

私達は条例施行を前に、石けんアドバイザーとして毎夜のように町内を廻りました。石けん用、合洗用の２台の洗濯機と合洗の害を訴えるビデオ等を持ち、地区の集会所で洗濯の実演と話し合いを重ねました。集まった人々も熱心に耳を傾け、覗き込むように実演を見て下さいました。

今はびわ湖の汚染の原因は複雑多様化し、

がくるかもしれない。それを本当にかすかな望みとしてやるしかないのかなと。

そのせっけん運動の時は、たぶん、その洗剤を使わなければ確実に琵琶湖はきれいになると信じて運動がヒートアップしたというところもかなりあって、当時の運動していた人たちにとっても、「これをやれば必ずきれいになる」という、すごく確固たる確信があったからすごい力になった。

でも、私たちはできることをやることによる確信を得る、そのところからまず始めて、次世代につないで来てもらっていることを、継続してやることがとても必要なのだなと思いました、今日聞いていて。

奥田 途中で出たリンの排出ですけれども、一応県のほうで試算している中で、実際の生活から出ているのはまだかなり高いというのがあります。ただ、農業についても、実は滋賀県の農業の特性もあるかもしれませんけれども、田んぼの代掻きをやっているときにはかなり出ているというふうにも思われます。

そういったことに対して、滋賀県で「環境こだわり農業」というようなかたちで、環境に考慮して、今の技術での利便性の高い作り方よりも、ちょっと不便だけれども、農薬の使用量を半分にしようとか、そういったリンだけではないのですけれども、そういったところで、物を作ること自体にもそういったことを教えていこうというような取り組み、これも広がってきています。

この根底は、たぶんそういうせっけん運動から始まって、みんなで何かをしたい。誰かにやってもらうのではなく、みんなで何かをしなければというような思いがたぶん根底にはあると思います。

それと、今のこの琵琶湖で環境の仕事をさせてもらって思うのは、私たち、今も伊藤さんが言われたように、いま我々がやってどういうふうにそれが効果になるかわからないですけれども、「なぜ滋賀県がやらなくてはいけないんだ」ではなくて、「滋賀県がやらなくて、ほかは誰がやるんだ」というものが、特に琵琶湖を中心にした地理的な特性、それとこれまでせっけん運動でみんなで共感を共有していたあの感覚、こういったものがある。ここでやらなかったら、では世界中、日本だけではなく世界を含めてどこでやるのだと。

大谷 イラクで人質になった高遠さんの話ですが、みんなから散々バッシングされた。彼女は今イラクには入れないのでヨルダンからイラクの子どもたちを支援しているそうです。テレビの取材で私は「イラクで、遠くのヨルダンから子どもたち10人か15人支援したって何になるんだ」と聞いたのです。彼女がしばらく考えて言ったのは、たった一言、「微力と無力は違う」と。これに尽きる。

まさに私はそうだなと思ったのです。環境問題というのは、微力を寄せ集めていれば、決して無力ではない。これはある意味、せっけん運動の原点だったような気がするのです。最初、子どもを持っているお母さんだとか、当時はまだ洗濯といえば女性のもっぱらの仕事だった。あまり社会に、まだ当時としては出てこない女性たちが、自分たちの生活の中で一番身近なところで、そのせっけんという非常に小さな単位、大型船の海洋汚染みたいなものではないところから始めた。微力が全部寄せ集まればそれは無力ではない。まさに環境問題の原点みたいなものです。

だから「私一人がやったってしょうがない」なんて言わないで、頑張ってください。ありがとうございました。

全員 ありがとうございました。

たとえ全国のマスコミを騒がす運動や何十万という人が一同に会する運動を起こすことでないにしても、かつてのせっけん運動など琵琶湖を中心とした環境運動の魂は、滋賀県だけに止まらず第2第3世代に広く深く静かに受け継がれていっているようです。その魂が新たな時代にどういったかたちで現れてくるか、たいへん注目されます。

単にチッソ、リンを抑制するのみでは解決されなくなってしまいました。

地球規模の環境汚染が、そのままびわ湖の問題と云える時代になって、私達にもそれなりの学習の必要が求められています。

石けん運動こそが、私達の環境学習の原点であったという誇りを持ちながら、美しいびわ湖、くらしやすい環境を守るためにより一層地道な学習と実践を重ねて行きたいと思っております。

県外環境取組事例

茅葺きスローフードレストラン「茅乃舎」

株式会社久原本家（くばらほんけ）
代表取締役社長　河邉（かわべ）　哲司（福岡県粕屋郡久山町）

九州、福岡県福岡インター近くの山の中に大きな茅葺きのスローフードレストランを営業している会社があります。たとえば琵琶湖の環境保全のため、ヨシの利用ということを考える時、かつてのようにヨシが民間で使用されるということが重要です。しかしながら現代では大量にヨシなどを使う茅葺き民家は廃れつつあります。この風潮に逆行し、ビジネスのシンボルとして茅葺き建築を新築しその中で営業し、全国へその情報を発信する株式会社久原本家。その遙かなる経営ビジョンを伺います。

日本の伝統の発信

まず、山の中にこういった茅葺きのレストランをつくられた経緯をご説明ください。

河邉　元々、私の母の里が造り酒屋でして、287年ぐらいになるのです。そこが2年前に25年ぶりに茅葺きを葺き替えたのです。元々、私は茅葺きに非常に興味があったものですから見に行きました。今まで見ていたのも確かにそれなりには感動していたのですが、やはり葺き替えている姿を見たときに「うわー」という感動をおぼえました。もう、その一瞬で、こういう茅葺きでレストランをやろうと、決断した思いでした。

もちろん、それまでは場所もまだ決めていませんでしたし、漠然とこの辺りでしたいなということは以前からあったのにはあったのですが。この時に、茅葺きの建物を久山の猪野（福岡県久山町）でといったイメージが鮮明に広がり、もうビリビリと心が高鳴ったのです。そして、その足ですぐ帰ってきまして、久山にある先祖代々のお墓にお参りしました。そして、茅葺きのレストランを久山（猪野）でやりますと報告したのです。それは、本当に自分でもびっくりするほどの心の高まりでした。

私どもは、単純に茅葺きという日本の伝統建築の下で、日本の伝統食を味わっていただきたい。そして、廃れ行く日本の伝統文化を少しでも盛り上げていきたいなと思っています。また、ご来店いただいたお客様に少しでも感覚的に日本の伝統文化のよさを感じ取っていただき、そして「自分もこういう建物に住みたいよね。」なんていうことを1人でも多くの人に思っていただけると、私はこれを作った意味があるのではないかなと思っているのです。

平日でもすごくお客さん入られていますね。

河邉　そうですね。まだまだ全体的な評価でどうのこうのという段階ではないのですが、お蔭様で、茅葺きという建物が皆さんの心を打っているというのは事実です。「これ、昔にあったよね。」っていう、哀愁だったり郷愁だったりするんですね。そういう部分で皆さんの琴線に触れる部分があるのではないかなと思います。

そして、かなり遠方からもご来店いただき、口々に宣伝をしていただいています。本当にありがたい

ことです。福岡に行ったら、または、九州に行ったら「茅乃舎（かやのや）」に寄りたいよね。というような評価をいただければ幸せだなと思っています。特に、外国からのお客様がお見えになると、それは大層に喜んでいただけます。それほど日本の中で日本らしい伝統文化が少なくなっているのかもしれませんし、我々自身が日本の伝統文化の良さを忘れているのかもしれませんね。ヨーロッパのほうでも、茅葺きの建物があると聞きますが、日本の茅葺き職人の屋根作りの繊細さでは比にならないと思います。建築や食に限らず、日本らしい伝統文化を継承し、世界に評価されていく気運が高まればいいですね。例えば、いま私どもの本業の醤油というのは、世界でもショウユソースとして幅広く利用されていますし、和食はヘルシーメニューとしてヨーロッパやアメリカで高い評価を受け、食文化として定着してきています。そういう意味では、食という切り口で日本の伝統が世界に評価されてきたといっていいでしょう。今度は、建築という切り口で、茅葺きというものの良さが、世界に評価されるということがあってほしいなと思っています。

四代目の仕事

もともとは何屋さんですか

河邊　もともと我々は醤油屋で、醤油、味噌、酢などをつくってきました。このような古来からある醸造調味料は先人の知恵とも言いましょうか、塩・水・穀物・微生物など自然界に生きる生命力を借りてつくるものですが、そういう意味では、茅葺きの建物というのも、茅・木・土といった自然界にある生命力を持った素材ばかりで、もともと日本の伝統という意味では、同一線上にあるのではないかなといったイメージをもっています。

　我々の会社は創業113年で、私は四代目です。四代目として、五代目、六代目につながる基盤をつくることも私の役割だと考えています。今、いろいろと事業を組立てる上で、創業200年を見据えた組み立てをすることを考えています。要するに、あまり近くの足元ばかりを見ずに、少し遠回りでもいいからしっかりと評価信頼されることをしていこうということです。

久原本家（久山町久原）

　こういう茅葺きというのも確かに投資金額が大きく、なかなかここだけで採算をあわせていくのは難しく、長期的にみてどのような位置づけでこのレストラン事業をとらえていくかといった考えでいます。

　私は113年、四代続く醤油屋の後継者として、次の代に継承していくことを前提に事業をさせていただいていますが、たとえば茅葺きの職人さんにしても後継者不足が深刻な問題で、少しでも今回の茅葺きの建物が色々な人の目に触れ、自分もこんな日本の伝統文化を継承できる仕事をやりたいなと思ってくれるような、若者がでてきてくれればありがたいと思っています。実際に、今回の茅葺き建築工事を見学していた若者が、茅葺き職人さんに弟子入りしたエピソードもあり、私自身大変うれしくやり甲斐があったなと思っています。

スローフードを選んだ理由

では、茅葺きの建物の、中身をどうするかという問題がありますよね。例えば、焼肉屋さんをやりますということではたれは使うかもしれませんが、イメージとはずれますね。やはり、「スローフード」というのを選ばれたというのはなかなか面白いなと思っているのですが。

河邊　ある人に、祖業である醤油、味噌、酢というものを再度見直して、充実したいという話をしたら、「それはあんた、スローフードやない。」と言われたのです。「スローフードて何ね。」と言ったら、「今、イタリアではこうこうよ。」と。それで6年前に私がイタリアに行って、スローフード運動を知り、「ああ、そうか。それは私が考えていることと基本的には同じやな。」と思ったのです。

　その当時は、まだ日本でスローフードという言葉は聞きませんでしたけど、それからしばらくしてだんだんと耳にするようになっていました。その後、いろいろと醸造について考えていくうちに、最後はその川上にある原料にたどり着き、農業をということになったのです。その当時は、原産地の偽装問題や、食品の安全性についての偽装というものがたびたび事件として取り上げられている時でしたので、やはり本物を作るには、その原料から作らないといけないということで、農業をやろうということになったのです。

　そうして農業をやっていくうちに、自分たちで育てた農産物を食品加工に利用するだけでは、我々の理念を伝えきれない。もっともっと我々が取り組んでいることをお伝えし、食の大事さをお客様とともに分かち合える場が欲しいということになって、今回のレストラン構想となったのです。そういう意味では、ビジネスで儲ける、儲けないといった発想よりは、モノづくりの長期的理念から考え抜いた結果として、違和感なく自然な流れで、農業・醸造・食品作り・茅葺きのレストランという組み立てが無理せずに描けたのではないかなと思っています。

日本人の本質的なものみたいな感じがしますね。でも事業というのは勝たないと評価していただけませんね。もう少し今の事業についてお聞かせください。

河邊　そうですね。先ほども言いましたように、私は代々続く醤油屋の息子ですが、大学を卒業後する頃は、普通に他の企業への就職を希望していました。でも、父に説得され仕方なく家業を継がされました。その当時は社員が6名で、醤油屋のマークが入った前掛けをして一軒一軒醤油を配達するのが日課でした。お客様の家の勝手口から入って　台所に行き、空いている醤油瓶と入れ替えに置いてくるの

です。そして、盆正月に集金をするような感じでした。

10年前に父が亡くなり、書類を整理しているときに昔の決算書を見ていたら、ちょうど私が入社した年の売上が年間6000万円でした。100万円程度の利益だったと思います。そういう状況でしたから、大学卒業したばかりの私にすれば、家業の醤油屋が夢も希望もない仕事に思えたのです。

意気盛んな当時の私は、こんなことで人生を終わりたくないと悩みながら、醤油以外の何かを探していました。そんなとき、あるきっかけで「たれ」をやろうと思いました。最初につくった「たれ」は、餃子のたれでした。それからは、何とか醤油から脱皮しないといけないということで色々な「たれ」作りにチャレンジしました。その後も、「たれ」の開発、製造をしながら少しづつ売上を伸ばしていきましたが、今ではほとんどの食品に「たれ」が添付されることが主流となり、大正解だったかなと。

ただ、「たれ」の製造といっても、ほとんどがOEM（相手先ブランド）で、食材に添付したり、加工に使用されるものを、ご希望の味で、ご希望の包装形態にしてお納めするといったものでした。我々のブランド名が表に出ない下請けの仕事なわけです。取引が増えるにつれて、味作りのノウハウは蓄積していくものの、食品に「たれ」が付くといったことが一般的になり、この業界も競争が激しくなり、お客様である食品メーカーの販売状況にも大きく左右され、厳しい競争の中でいつ切られるか分からないという不安がでてきました。そのようなことで、我々は自社のブランド商品を持ちたいと考えるようになりました。もちろん、醤油という自社ブランド商品はあったわけですが、これまで我々が得意としてきた「たれ」がほとんどの食品に添付されるようになったことで、家庭での醤油の需要が減り、なおかつ流通網の大型化から大手ブランドの醤油メーカーが地方までを圧巻する状況で、なんとしても醤油以外での新たな自社商品の開発が必要な状況でした。

そこで着目したのが、博多の名産品である辛子明太子でした。既に博多にはたくさんのメーカーがしのぎを削っている状況で、業界最後発のチャレンジでした。従来からつくられている辛子明太子とは各段に差別化した、より卵にこだわった明太子をつくろうという思いで挑戦してみたのです。

おかげさまで、そうした原料へのこだわりが受け入れられて、最後発ながらも少しづつご支持をいただくようになりました。その後、「椒房庵本店（しょうぼうあんほんてん）」をつくりましたが、その際の発想もこれまでの街中に見られる明太子屋さんとはまったく違ったイメージで、古材を使って古民家を再生し、街中とはかけ離れた田舎（福岡県久山町の本社工場敷地内）に建てたわけです。今までの明太子屋さんと言えば、交通の便がいい場所で、だいたい赤やピンクを主体とした内装の店が多い中にあって、まったく異色の明太子屋をつくったのです。しかも、田舎にあるという多少の不便さが、逆に脚光を浴びることになりました。こういった経験が一つの土台となり今の発想となったのです。

場所に関係なく、いい物だったら必ず支持していただけるのだという信念が自信に変わりました。今回の「茅乃舎」でもそんな自信が後押しとなり、わざわざ山の中へご来店いただけるような魅力ある店作りをしようと決心し、挑戦できたのだと思っています。

このような「椒房庵」での経験が積み重なってなければ、とてもこんな山の中でレストランをしようなんて発想はなかっただろうと思います。

本物というものを求めて行けば確かに時間はかかりますし、そう簡単にいくものではありませんが、本当に歯を食いしばって本物を求めていけば確実に受け入れてくださるお客様がいらっしゃる。「茅乃舎」も、まだスタートしたばかりで素材・調理法・おもてなし等々、全てに満足のいくレベルではありませんが、時間をかけながらでも、皆様に本物と評価していただけるように育てていきたいと思っています。それに「茅乃舎」は単なるレストランとしてではなく、我々のスローフード事業の表現の場であり、これから展開する無添加の加工食品だったり、減農薬栽培の農産物を使った加工食品を展開していくための勉強の場としても考えています。例えば、今取り組んでいるように無農薬でトマトを栽培し、トマトケチャップにするといった商品を「茅乃舎」というブランド名で広く全国に販売していきたいと考えています。

三本の矢

「久原本家」は、いろいろな調味料、たれづくりを中心とした醸造、加工調味料のブランドとして。「椒房庵」は明太子のほか海の幸を中心とした加工食品のブランドとして。「茅乃舎」では、野の幸、山の幸を中心に無添加を基本とした加工食品のブランドとして考えています。この3本の矢で事業をしていきたいと。毛利元就ではないですけれどもね。これには過去の反省がありまして、一つに私どもが113年商売をしてきた中で、昔、朝鮮や満州に醤油や酢を販売していた、それは華やかな時代がありました。それが終戦によって販路が絶たれ、大変な経営状態に陥った時代もあったようで、そんな浮き沈みがないように今からその三本の矢を育てていこうというものです。創業200年目にこの会社が存続できるためにはという発想で、この3本の矢をもって、浮き沈みのない会社にしていこうというものなのです。

あくまでも目先ではなくて、長期戦略の下に、良い物を限りなく求めていく。小手先でつくろうようなことをせず、多少遠回りでも、本質を考えたものづくりやっていく。それが、結果的に会社の繁栄につながるものと考えています。今回の茅葺きもそう

茅乃舎のスローフード料理

です。そして、盆正月に集金をするような感じでした。

10年前に父が亡くなり、書類を整理しているときに昔の決算書を見ていたら、ちょうど私が入社した年の売上が年間６０００万円でした。１００万円程度の利益だったと思います。そういう状況でしたから、大学卒業したばかりの私にすれば、家業の醤油屋が夢も希望もない仕事に思えたのです。

意気盛んな当時の私は、こんなことで人生を終わりたくないと悩みながら、醤油以外の何かを探していました。そんなとき、あるきっかけで「たれ」をやろうと思いました。最初につくった「たれ」は、餃子のたれでした。それからは、何とか醤油から脱皮しないといけないということで色々な「たれ」作りにチャレンジしました。その後も、「たれ」の開発、製造をしながら少しづつ売上を伸ばしていきましたが、今ではほとんどの食品に「たれ」が添付されることが主流となり、大正解だったかなと。

ただ、「たれ」の製造といっても、ほとんどがＯＥＭ（相手先ブランド）で、食材に添付したり、加工に使用されるものを、ご希望の味で、ご希望の包装形態にしてお納めするといったものでした。我々のブランド名が表に出ない下請けの仕事なわけです。取引が増えるにつれて、味作りのノウハウは蓄積していくものの、食品に「たれ」が付くといったことが一般的になり、この業界も競争が激しくなり、お客様である食品メーカーの販売状況にも大きく左右され、厳しい競争の中でいつ切られるか分からないという不安がでてきました。そのようなことで、我々は自社のブランド商品を持ちたいと考えるようになりました。もちろん、醤油という自社ブランド商品はあったわけですが、これまで我々が得意としてきた「たれ」がほとんどの食品に添付されるようになったことで、家庭での醤油の需要が減り、なおかつ流通網の大型化から大手ブランドの醤油メーカーが地方までを圧巻する状況で、なんとしても醤油以外での新たな自社商品の開発が必要な状況でした。

そこで着目したのが、博多の名産品である辛子明太子でした。既に博多にはたくさんのメーカーがしのぎを削っている状況で、業界最後発のチャレンジでした。従来からつくられている辛子明太子とは各段に差別化した、より卵にこだわった明太子をつくろうという思いで挑戦してみたのです。

おかげさまで、そうした原料へのこだわりが受け入れられて、最後発ながらも少しづつご支持をいただくようになりました。その後、「椒房庵本店（しょうぼうあんほんてん）」をつくりましたが、その際の発想もこれまでの街中に見られる明太子屋さんとはまったく違ったイメージで、古材を使って古民家を再生し、街中とはかけ離れた田舎（福岡県久山町の本社工場敷地内）に建てたわけです。今までの明太子屋さんと言えば、交通の便がいい場所で、だいたい赤やピンクを主体とした内装の店が多い中にあって、まったく異色の明太子屋をつくったのです。しかも、田舎にあるという多少の不便さが、逆に脚光を浴びることになりました。こういった経験が一つの土台となり今の発想となったのです。

場所に関係なく、いい物だったら必ず支持していただけるのだという信念が自信に変わりました。今回の「茅乃舎」でもそんな自信が後押しとなり、わざわざ山の中へご来店いただけるような魅力ある店作りをしようと決心し、挑戦できたのだと思っています。

このような「椒房庵」での経験が積み重なってなければ、とてもこんな山の中でレストランをしようなんて発想はなかっただろうと思います。

本物というものを求めて行けば確かに時間はかかりますし、そう簡単にいくものではありませんが、本当に歯を食いしばって本物を求めていけば確実に受け入れてくださるお客様がいらっしゃる。「茅乃舎」も、まだスタートしたばかりで素材・調理法・おもてなし等々、全てに満足のいくレベルではありませんが、時間をかけながらでも、皆様に本物と評価していただけるように育てていきたいと思っています。それに「茅乃舎」は単なるレストランとしてではなく、我々のスローフード事業の表現の場であり、これから展開する無添加の加工食品だったり、減農薬栽培の農産物を使った加工食品を展開していくための勉強の場としても考えています。例えば、今取り組んでいるように無農薬でトマトを栽培し、トマトケチャップにするといった商品を「茅乃舎」というブランド名で広く全国に販売していきたいと考えています。

三本の矢

「久原本家」は、いろいろな調味料、たれづくりを中心とした醸造、加工調味料のブランドとして。「椒房庵」は明太子のほか海の幸を中心とした加工食品のブランドとして。「茅乃舎」では、野の幸、山の幸を中心に無添加を基本とした加工食品のブランドとして考えています。この3本の矢で事業をしていきたいと。毛利元就ではないですけれどもね。これには過去の反省がありまして、一つに私どもが１１３年商売をしてきた中で、昔、朝鮮や満州に醤油や酢を販売していた、それは華やかな時代がありました。それが終戦によって販路が絶たれ、大変な経営状態に陥った時代もあったようで、そんな浮き沈みがないように今からその三本の矢を育てていこうというものです。創業２００年目にこの会社が存続できるためにはという発想で、この3本の矢をもって、浮き沈みのない会社にしていこうというものなのです。

あくまでも目先ではなくて、長期戦略の下に、良い物を限りなく求めていく。小手先でつくろうようなことをせず、多少遠回りでも、本質を考えたものづくりやっていく。それが、結果的に会社の繁栄につながるものと考えています。今回の茅葺きもそう

茅乃舎のスローフード料理

新エネルギーを考える

最近、新聞紙上などで、「新エネルギー」なる言葉がよく出てきます。これは、水力、火力、原子力などのすでにある電力発電施設などに代わり太陽光、風力、バイオマスなどで電力などを生み出すエネルギーのことです。原油高や石油埋蔵量への不安、さらに地球温暖化などの環境問題に対応するために、次の時代に向かって新しいエネルギー源を開発することは必要です。

ただし、現状では「割に合わない」エネルギーとの声もあり、爆発的に普及しつつあるといえないのが現状です。でも、多くのメーカー、研究機関等により高性能な発電システムも生まれつつあります。ここでは、ひとつひとつを確認してみましょう。

野洲高校屋上の太陽光発電施設

太陽光発電

太陽光発電は、太陽の無限のエネルギーをソーラーパネルに受けて、それを電気に変換する発電方法です。太陽の光があたるところならどこでも設置ができます。近年住宅地などで、屋根にソーラーパネルを設置されているお宅を目にするようになりました。また、多くの大手メーカーなどが機器の開発販売に参入しています。そういう意味では、普及してきた新エネルギーといえると思います。

では、内容的にはいかがでしょうか。実例として大きなものでは、当財団がNEDO（独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構）等の補助で高校の屋上に設置したものがあります。まだ記憶の新しい全国高校サッカーで優勝した野洲高校の屋上に大型の太陽光発電を多くの市民の方から出資していただいて2004年2月に設置いたしました。（上写真）設置費用は約1500万円（ただし屋上設置費や測定装置等も含む）かかりましたが、2004年度には約6,411kW時の発電量があり、今後も、元気な高校生の学舎にクリーンな電気を提供してくれると思います。

では一般家庭ではどうでしょうか。現在滋賀県では、約5000軒弱の個人住宅で設置されているといわれています。購入設置コストは、出力1kWあたり約70万円で、平均すると3・7kW前後の家庭が多い（2006年1月現在）といわれます。家計的には2000cc車を購入するくらいのイメージでしょうか。発電量については、機器の性能や天候にも左右されますが、出力1kWあたり4人家族で使う約1／3の使用電力（月間平均約100kW時）がまかなえるようです。しかも、ほとんどの世帯が電力会社に売電して、効率的に電気を利用しているようです。

それがここ数年で設置数が急増してきたといわれます。どうしてでしょうか。考えられることは、価格の低下・メーカーのコマーシャル等もあると思いますが。太陽光のエネルギーの変換効率がアップしたこと、つまり太陽の光を無駄なく電気に変える性能が向上していること。ソーラーパネルの形状や大きさが多様化しどんな屋根でも無駄なく設置できるように改良されてきたこと。そして「太陽光発電」というものが世間的に認知されてきたこと。地球温暖化の問題で二酸化炭素を出さないクリーンなエネルギーへの関心が高まったこと。などなどいろいろな理由が考えられます。また滋賀県・一部の市町からの補助金などもあります。

風力発電

過去に北海道を舞台にしたドラマの主人公の家に取り付けられていたので、印象に残っている方も多いと思います。しかしヨーロッパなどでは多くの風車がみられますが、一定の風力風向が必要で、大型のものでないと効率が悪いので、日本では限られた地域しか普及していきませんでした。

滋賀県で風力発電といえば、「草津夢風車」（写真）をイメージする人は多いと思います。

「草津夢風車」は草津市が琵琶湖岸の烏丸半島に設置した風力発電で、この大きな風車は湖岸道路からはもちろん、遠くからも望めるものです。草津市によると、設置費用は約3億円かかったそうですが、2004年度で754,309kW時も発電したということです。しかし、一般家庭用としては、まだまだの感があります。

バイオマス発電

バイオマス発電は、製材時の木くず・チップなどの木材資源等や畜産糞尿などで発生するガスを使って発電するものです。これは製材所や畜産施設の派生物を利用して発電するもので、一般家庭でできるというものではないようです。ただし、ゴミとなるような用途のない木材資源や環境に悪いガスをうまく利用して、石油や石炭を使わずに発電できるので、資源の有効利用がうまくできる発電システムといえます。

当財団で、何人かの太陽光発電の利用者に直接設置理由を伺ってみました。多くは住居の新築改築時に購入される生活こだわり派でした。つまり月々の水光熱費等家計の節約はもちろん、太陽光発電を設置したことでの家庭内の環境意識の向上を目指されるという方々です。こういう方は高級な住宅に住んでいても、質素・始末をして生きることが人間として大切で、それを守りつづける家庭はレベルの高い家庭であるとする考え方の方々かもしれません。

また、ある建築設計業の方は、設置した日から意識が変わり、電気を使うことがもったいなくなって、最終的には「節電し太陽光だけで電気を賄うこと」を目標としているそうです。それで冷暖房や照明をこまめに調整することになって、逆に季節というものを感じるようになったともおっしゃっていました。また職業柄、屋根だけではなく、窓やバルコニー、棟、あるしは車庫などに工夫して設置することもデザイン上面白いのではないか。また阪神大震災の時、太陽光発電の家だけ灯りがともっていたことが印象に残ったとおっしゃっていました。

それぞれの新エネルギーの発電がすぐに一般家庭に広く普及していくとはいえないかもしれません。しかし日進月歩で発電技術は向上しています。今後も大きな関心を持ち注目していきましょう。

草津夢風車

本年度も当財団では、様々な事業を実施しています。今号では、本年2月までに行われた主な事業をご紹介します。

財団活動紹介

ヨシ紙製作事業

大津絵・琵琶湖の魚シリーズのヨシ絵葉書を製作いたしました。

ヨシ群落維持管理事業

12月に湖北町の琵琶湖岸でボランティアの方々といっしょに、ヨシ刈りを行いました。

ヨシ群落造成事業

琵琶湖のヨシ原を回復するため、長浜市湖岸に自然再生法による木杭突堤工事を行いました。

湖底改善生産力向上事業

琵琶湖南湖で、シジミ漁場の復活を図るため、約440トンの水草を除去し、湖底耕耘を行い改善を図りました。

環境情報発信事業

本誌「明日の淡海」を２回発行しました。またインターネットのトップページを一新し、各種環境情報を発信しています。

環境保全活動支援事業

県内で環境保全活動を計画している18団体に助成や後援を行いました。

環境学習推進事業

お～みECOくらぶのメンバーに、会報の発行や秋の体験教室などを実施しました。

１月には、ラムサール水鳥観察会を実施しました。

地球温暖化防止活動推進センター普及啓発・広報事業

滋賀県地球温暖化防止活動推進員を中心に県下各地で啓発活動が催されました。推進員さんの活躍は本誌18P～19Pをご覧ください。

省エネ・お得ポイント事業

滋賀県内の58グループ924世帯の家庭が登録され、7月から10月の電気使用量を対象に省エネに取り組まれました。

太陽光発電設置促進滋賀モデル推進事業

二酸化炭素を削減し地球温暖化の防止に役立つ太陽光発電システムの一般家庭における設置を促進するため、約550家族に余剰電力の発生量に応じて助成を行いました。

滋賀県地球温暖化防止活動推進員奮闘記

滋賀県地球温暖化防止活動推進センターでは、平成12年度より滋賀県知事から委嘱を受けた100名の地球温暖化防止活動推進員の方々に、滋賀県下の地元地域の人々に地球温暖化防止について様々なＰＲ活動を行っていただいています。本年度は、「出前講座」ということでセンターのパネルや啓発グッズを利用して、学校や行政関係など多くのところに出かけていただいています。その反面、様々なご苦労もあるようです。ここでは、各地域でグループを作り活躍している推進員さん４名に、体験談等をお聞かせいただきました。

出前講座（下阪本小学校）

白石　進　さん

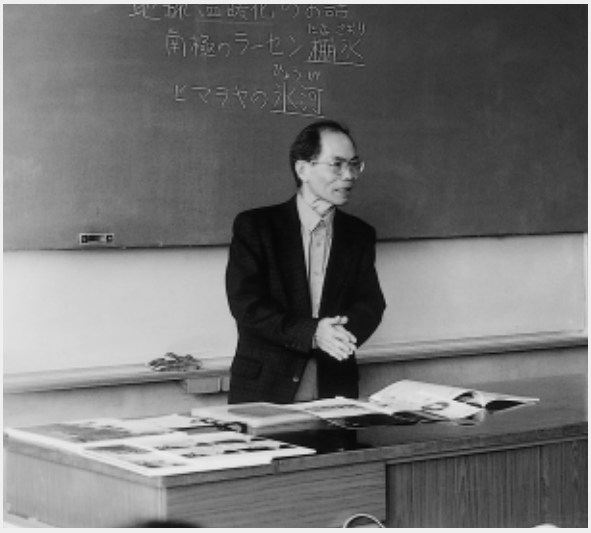
（大津湖西地域）

「地域の多くの人に地球温暖化を理解いただきたい」という思いから、推進員をはじめました。まずは地球温暖化を学ぶことからはじめ、地域の人々に啓発し、そこからまた学んでということを、繰り返していこうというものでした。自治会の会長をした経験から、まずは自治会単位でということで、46自治会長さんの集まりで地球温暖化について訴え、それを文書にしたものを持ち帰って回覧してもらいました。ただその反響は、「よくわかった」というものもありましたが、多くはあまりはかばかしくないものでした。さらに地元老人会で話したところ、5分で「もうごめんだ」といわれて、この時点で地球温暖化防止を訴えることは大変なことだと思われました。

これを青グループのメンバーで話した結果、それでは、若い人、とりあえず小学生向けに、ねらいをつけようということになりました。では、どうしたら小学校への道をつけられるか。まず教育委員会を訪問しました。そこで2校推薦していただけたのです。比叡平小学校・下阪本小学校の2校でした。すぐに小学校へ説明にいくと、すでに教育委員会より資料が届いており、話は順調に進んでいきました。出前講座として学校以外の人の話が聞けるということで興味を持っていただけたようです。学校としては、年間カリキュラムの中で、理科の授業か、総合学習の授業かのどちらに位置付けるかという問題もありましたが、話の内容、教科書との整合性など何度も学校の先生と打ち合わせをして進めていきました。

下阪本小学校では、5・6年生について午前中授業をしました。パネルや石油換算のバックなどを使い実施いたしました。数人のこどもに感想を聞いたところ地球温暖化の話が聞けてとてもよかったという評判で大変うれしかったです。滋賀県地球温暖化防止活動推進センターのパネルを使い、興味を持った児童がパネルの前でメモを取るという姿もみられました。後で先生から、厳しい批評があるかなと思ったら、是非今後もよろしくお願いしますと言っていただけました。比叡平小学校では、パネルを使った授業と、ソーラーカーの組み立てを行いました。ちょうど天気もよく、外でよくソーラーカーは走りました。ここも評判はよかったです。

今後も企業や学校など廻らしていただきたいと考えています。教育委員会からは「中学校も」というお話を伺っております。また幼稚園で人形劇をやったらどうかという計画があって、これもやりたいと思っています。



出前講座（比叡平小学校）

堀田　良太郎　さん（湖東湖北地域）

環境に興味を持ち始めたのは地元区長会の会長をしてびわ町水環境推進委員会に入った時からです。そんなこともあってか行政より推薦され、地球温暖化防止活動推進員として勉強させてもらっています。こういった役職をできるだけ多くの人に経験してもらいたいですね。活動については、行政と違い自分自身はなんの権限もありませんので、できるだけ多くの機会を利用して先々で多くの人と話をするということをやってます。たとえば、家では私はゴミ係でゴミ出しをしていますが、ゴミ集積場所で感じた様々なことを、色々なところで話をすることにしています。また地元の小学生にも話をする機会も多いのでこういったことを話しています。今後も地道に一歩づつ日々活動を重ねていきたいと思っています。

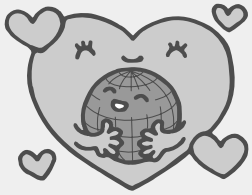
啓発活動（彦根市）

藤井　武二　さん（湖南地域）

もともと公害防止・省エネ機器等を製造販売している会社に勤めていました。定年後も環境をライフワークとし社会貢献をしたいと思っていました。そこで推進員に応募した後は、野洲市や守山市の環境課に積極的に働きかけて、野洲市文化ホールや守山環境フェスタなどのイベントに参加しています。特に滋賀県地球温暖化防止活動推進センターの省エネお得ポイント制度を利用して、地元近江富士団地の自治会にもＰＲしました。この制度を利用して、自治会の環境意識の高揚を図ったのです。これはほとんど住民の方に参加していただいて効果があったと思います。

今は野洲市環境基本計画の作成委員をしています。ビオトープや里山など地元に地の付いた活動を伴う計画を作ってしていきたいと思っています。やはり地元行政と自治会がしっかりと結びついて進んでいくことがベストであると思います。さらに出前講座などを利用して、こういった輪を広げていきたいですね。また自身が所属するボイラー協会などを通じて、産業界の方にもこの輪を広げたいと思っています。

啓発活動（守山市）



山田　勇　さん（東近江甲賀地域）

以前から環境ということには興味があり、「地球温暖化」について勉強してみたいと思っていました。今、栗東自然観察の森で仕事をし、休みには仲間と町歩きや竹を使ったキャンプなどの活動を企画しています。そういった活動と地球温暖化防止をすぐに結びつけられればいいのですが、現状ではまだいい工夫が出ません。もう少し時間がかかりますね。ただ、昔はいなかった生物、たとえばナガサキアゲハが北上しているということもありますし、なにか結びつくことは将来あると思います。その中で先日、自然の中で季節を感じる試みを行いました。たとえば、旧暦で季節を感じ、自然の変化を感じることなどです。これも地球温暖化とうまく結びつくことができると面白い企画となると思っています。

先日、安土小学校へ出前講座に行きました。元気のいい子が多く、対話しながら温暖化のメカニズムや一日に一人が消費するエネルギーの重さを体験してもらったり、簡単なクイズがあったりと楽しく過ごすことができました。

出前講座（安土小学校）

明日の淡海 Vol.14
2006.3.31発行
発行 財団法人 淡海環境保全財団
〒520-0807 大津市松本1丁目2番1号 大津合同庁舎内
TEL：077-524-7168 FAX：077-524-7178
E-mail：info@ohmi.or.jp URL http：//www.ohmi.or.jp

原稿の募集について

機関紙「明日の淡海」では、環境や自然に関心のある方々の意見・提言などを募集しています。

環境問題に対する考え方や環境施策への意見・提言等
環境に優しい暮らしにつながる意見・提言等
美しい自然や自然保護に対する意見・提言等

※採用分には薄謝進呈
※当財団まで郵送かメールまたはFAXでお送りください。

PRINTED WITH SOYINK
R100
GPN Green Purchasing Network
本誌は、環境や資源の有効活用に配慮した印刷物です